



特集

山・里・町をつなぐ 実践的環境教育への 取組

— 現代GP —

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子
絵 成瀬洋平（本学卒業生）

ラルフ・エマソンの著書『自然』（1836年）は、アメリカ・ルネッサンスの導きの星として知られる、小さくて大きな本です。エマソンは、この本でたとえば、自然が人間のあらゆる言葉の表現の根本をつくっていることを明らかにして、人と自然の親しい関係を語りました。私はいま「星」「小さい、大きい」などと自然をあらわす言葉を使って人間的な価値を表現しましたが、人と自然の親密な関係を示す例です。

エマソンはこの本で、人は一つの循環系であり、世界だといいました。そして、宇宙もまた雨、風、森、海、月、星などの無数の循環系のつらなりからなっていて、人を支える世界だ、といっています。

自然が手をたずさえあつて人をとり巻き、ささえています

いったいどんなエンジェルが地球をこれほど見事に飾ったのでしょうか

大気の下に水の層である大洋がアレンジされ、雨をふらせる雲がただよい

気候帯がとりまいています

…何という使い勝手のよさでしょう



エマソンは個人が宇宙の中心であり、王者であるのだから、よく自然を見たらいい、といっています。それは知恵をみがく一生の仕事であり、エマソンはそこに個人の独立を見ました。『自然』の冒頭に掲げた詩に、『ロミオとジュリエット』で語られるジュリエットの魂の声を組み込んだのも、そのためでしょう。

バラはなんと呼ばれようとバラなのに

詩のもとになった文章は『A rose by any other name would smell as sweet』で、「バラは（いろいろな国で）いろいろな名で呼ばれていても、あまい香りに変わりはない」という意味です。ジュリエットは「家柄じゃない。私をみて」といいたかったでしょうが、エマソンは、バラのあまい香りを年毎に嗅ぐことに人間の経験の意味を代表させました。つまり、直感的に、あるいは長い時間をかけて身につける経験の知恵（wisdom）に個人を世界にむすびつける、高貴な価値をみました。

あなたが一人になりたいなら、…たとえば、森で星を見たらいかがでしょう
天空がはなつ光線があなたを今いる世界から切り離してくれますよ

「一人になりたいなら」とは、「（真理である）神と接したいのなら」という意味でしょう。神は見えなくても、神が創造した自然は目の前にあります（エマソンは魂を自己といい、それ以外の肉体を含むすべてを「自然」と呼んでいます）。『自然』は、あらゆる自然に関する書物を越えて壮大かつ人間的であり、多くの人が感動をもって読みました。

ヘンリー・ソローは、この本を読んでウォールデンの森に入り、小さな家を建てて2年余りくらししました。そして、その記録を『ウォールデン』（1856年）として刊行しました。『ウォールデン』は今日、自然の意味を問う生活記録の傑作とされています。また、リチャード・ダナーは、自然を深く経験できる下級船員として2年余りをカリフォルニアと行き来する帆船で働き、記録を『帆柱の前の二年間』（1840年）として刊行しました。この本は今日、ヨッ

バラは何と呼ばれ

ようつとも香しい



アメリカ・ルネッサンスとワールド・ミュージアム

今泉 吉晴



トマンのバイブルです。

もちろん、エマソンが『自然』を書いたのは単に自然を賛美するためではありません。自ら築いた文明の傘の下に入った人間はスピリッツを干涸びさせ、地球の王者の椅子から転げ落ちた、とエマソンは見ました。「人間は小さくなった」『安っぽい知恵』で地球を支配しようとしている」と書いています。

では、どうしたらいいか。エマソンは、人は詩心を取り戻し自然とのつながりを回復して、人間性を再生すべきだ、と訴えました。それにはたとえば、子どもの「生まれながらの知恵」に注目したらよいといっています。子どもは遊びの中で自然と共にあることの幸せを経験し、人間性を開花させている、というのです。そして、「王の杖を手をしている」のですから。



さあ、そこです。私たちの現実を見てみましょう。私の子ども時代からのことだけを見ても、田園は農業の大量使用と農業の大規模化のために見る影もありません。世界は経済の論理だけで動いているかのようです。エマソンの時代にくらべてどれほど人間が小さくなり、自然が遠くなったことでしょうか。私は都留市を流れる川がかつての美しい川ではない、と繰り返し聞かされてきました。桂川で遊んだガキ大将もはつらつたるおてんば娘も姿を消してひさしく、瀬や淵のよき遊び場の名前さえ忘れられようとしています。

エマソンの『自然』をはじめとするアメリカ・ルネッサンスの遺産は急速にその意味をかえ、私たちに身近な自然の回復が急務と伝える本になっています。かつて川遊びに興じたガキ大将とおてんば娘は、アメリカ・ルネッサンスの担い手たちに共感するでしょう。今や70歳になんなんとする山川の遊びの達人たちに集まってもらい、お茶のみながら（誠実に）話しをすればソローやダナの偉大さと語るのと同じです。

奇しくも作家の石牟礼道子さんが、子ども時代のチッソ工場に近い家のまへの美しかった浜の情景を描いて、こう書いています。



もと川あそび、山あそびの大将たちによびかけた、昔のあそびのたのしいシンポジウムがひらけたいものだろうか（『論座』2008年2月号）。

春のスピリッツが山川をめぐる私たちの小道をかざり、歌声が顔をほころばせてくれますよ。さあ私たちも、「山川遊びシンポジウム」の準備にとりかかろうではありませんか。

（いまいずみ よしはる・都留文科大学名誉教授、地域交流研究センター特別非常勤講師）

フィールド・ミュージアムって何？

フィールド・ミュージアムって何だろう。そう思われた方は多いと思います。ミュージアムというからには博物館かな。でも「フィールド」が付くから野外の博物館、それなら野外博物館って一体何だろう、といった風に。実は私もその一人でした。

フィールド・ミュージアムとは何か。それは「野生生物本来の生きいきとした暮らしと姿を自然の中で見ることのできる場所」、つまり「自然そのものが博物館」あるいは「地域そのものが博物館」という思想です。

自分の目で観ることへのこだわり

私が都留文科大学に着任した7年前には地域交流研究センターもまだ発足していませんでしたが、「フィールド・ミュージアム構想」の提唱者である今泉吉晴氏と北垣憲仁氏が中心になってムササビや野ネズミなど森の動物たちの暮らしを独自のスタイルと哲学をもって研究していました。独自のスタイルというのは、何か特別な機械や専門用具を使うわけではなく、森のなかで、自然のなかで、あるがままの動物たちの暮らしを丹念に観察・記録する、というものです。テクノロジーの発達した今の世の中、動物に発信機を付けたり、無人で自動撮影したり、と便利な道具はいくらでもあります。でも敢えてそのようなものを使わず、自ら自然のなかに身を置き、自分の目で生の動物たちをひたすら観ることにこだわります。

自分の目で観ることが何故大切なのか。それはたぶんそこに教科書のなかには書かれていない本当の自然の姿を見る、発見する喜びがある

都留文科大学は、文部科学省の補助金制度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)に、平成19年度に選定されました(事業は3年間)

特集：山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取組

フィールド・ミュージアムへ ようこそ！

— 現代GP —

坂田有紀子

からかもしれない。教科書はその分野の知識が体系立てて書かれています。教科書は私たちの住んでいるこの世界を理解するために作られたものですが、世界は教科書のなかに詰め込めるほど単純ではありません。限られたページのなかに収めるために教科書の知識はシンプルに一般化・統一化され、私たちをリアルな現実世界から逆に遠ざけているような気がします。真に世界を理解するためには、教科書だけでは不十分で、実物と対峙し、疑問を見つけ、自分で考え、試行錯誤する、といったプロセスを繰り返す必要があるのかもしれません。もちろん、教科書は必要なわけではありません。現実の世界と教科書を「つなぐ」体験が必要なのです。

「つなぐ」ことで見えてくるもの

ここで「つなぐ」という言葉がでてきましたが、この「つなぐ」という言葉は現代社会における一つのキーワードのような気がします。知識は専門化・断片化され、人々は自然から遠ざかり、都会では隣の住人の顔さえ知らない。科学技術の進歩や、社会システムの効率的・合理化によって便利で快適な世の中になりましたが、その反面、自然と人、人と人が分断されてしまっています。自然と人の関係を再考し自然と人を「つなぐ」、分断された知識や社会を「つなぐ」、地域社会のなかでこれまで別々に仕事をしてきた人々を「つなぐ」、生産者と消費者を「つなぐ」……「つなぐ」ことによって見えてくるものは何か。そこには生きいきとした学びや発見の喜び、温かい交流、生きがいや新しい雇用の創出、目指すべき持続可能な地域社会の姿など、豊かで成熟した未来が広がっているのではないかと想像しています。

さて、この特集でご紹介する現代GP「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取組」フィールド・ミュージアムへようこそ！」は、この「つなぐ」をキーワードにして、地域の自然や社会をフィールド・ミュージアムとして捉え、地域に根ざした実践的環境教育をおこなおうとするものです。本学が長年培ってきた「フィールド・ミュージアム」構想と本学の伝統である教員養成という特徴を活かし、自然環境教育の指導力を持つ教員の養成、コーディネーター的要素をもった地域の環境教育の担い手の養成を目的としています。そのための3つの柱として、

- 1・自然に学ぶ(自然環境教育)、
- 2・農に学ぶ(食・農・循環の学習)、
- 3・暮らしに学ぶ(人・町・自然をつなぐ地域研究)、

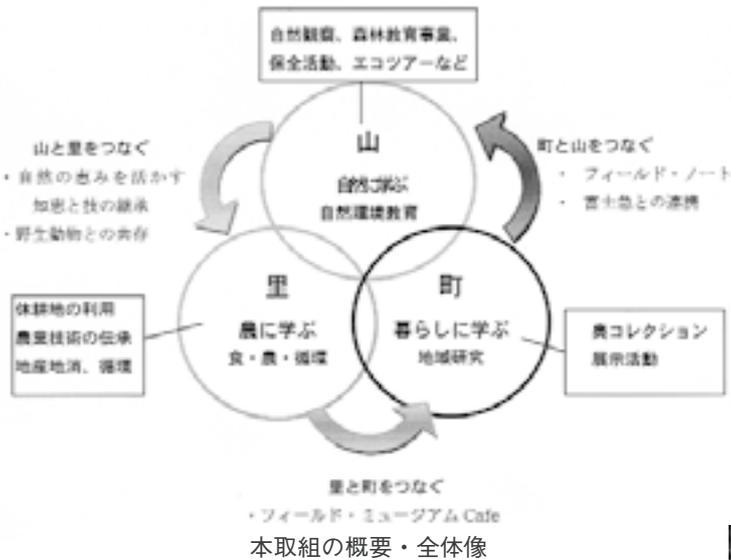
を掲げています。



「自然に学ぶ」では、学内外のフィールド・ミュージアムやビオトープを活用した教育活動、大月のNPO「シオジ森の学校」との連携、地域の人と自然をつなぐ「フィールドミュージアムカフェ」等の活動がおこなわれています。

「農に学ぶ」では地域の農業関係者の協力の下、休耕地を利用した学生たちによる畑作や稲作がおこなわれています。将来的には畑で取れた農作物を大学食堂で活用し残飯を畑へ戻すという地産地消・循環型の農業を教育に取り入れたいと考えています。

「暮らしに学ぶ」では、地域の自然の紹介や展示を街でおこなったり、暮らしのなかの知恵と技を地域の方々から学び・取材し、雑誌を通して紹介する活動をおこなっています。



本取組の概要・全体像



この後のページでこれらの活動の紹介がありますが、どの活動も大変ユニークかつ創造的で、参加した学生は大学の教室内では決して得られない多くのことを、地域の自然や地域の方々から学ばせていただいています。今後も地域の方々の協力を得ながら、これら3つの柱に沿った体系的・実践的な教育活動を展開し、地域社会における環境教育の担い手となる人材を育成し、全国に送り出したいと考えています。またこの取組が、単に環境教育の担い手の養成だけでなく、人と自然との関係を再考し、自然と共存する人の暮らしの在り方を探求することを通して、「人間探求」や「あたららしい地域文化の創造」につながってゆくことを願っています。

(さかた ゆきこ・初等教育学科教員)

第4回 地域交流研究フォーラム

「つなぐ はぐくむ フィールド・ミュージアム
—自然・食・暮らし・文化—」を開催する

2008年2月23日

畑 潤

本年度の地域交流研究フォーラムは、これまでのフィールド・ミュージアムの活動実績にもとづき、さらにゆたかな実践を展開していこうという「現代GP」の取り組みのスタートとなるものです。予想を超える多くの方（スタッフを含めて110名）が参加してくださいましたが、市民、学生、教員、自治体職員、民間企業など、参加者層が多彩であった点でも価値あるものとなりました。午前中は、西本勝美氏（地域交流研究センター長）の開会の挨拶のあと、坂田由紀子氏（フィールド・ミュージアム部門責任者）が「現代GP」の説明を行い、今泉吉晴氏（都留文科大学名誉教授）が記念講演を行いました。今泉氏の、「バラはどう呼ばれようとバラだ」と題する講演では、詳しいレジュメも用意され、ご自身のムササビ観察にかかわる経験などを、シートン、さらにはソロー、エマソンという思想家ともつないで語られました。今泉氏自身の探究の展開内容として話された「たった今、分かった」（come to a realization）という次元の問いを、会場全体でイメージ豊かに共有することができたように思います。この講演は、フィールド・ミュージアムと「現代GP」の取り組みの思想を提案するものとなりました。午後は、シンポジウムと総合討論とが行なわれました。シンポジウムでは、「現代GP」の取り組み構想（山＝自然に学ぶ、里＝農に学ぶ、町＝暮らしに学ぶ）を基礎に

して、北垣憲仁氏（「地域の自然と暮らしと農に学ぶ」）、小口尚良氏（「うら山観察会の役割」）、奥隆行氏（「＜都留写真帳＞をつくる」）、小宮正廣氏（「ミニコミ紙づくりの夢」）、杉本清氏（「都留の農業の現状と夢を語る」）の5名が、実践にもとづく報告をされました。それぞれに観察の精神が生きていて、対象をじっと見つめ、それを表現・記録する、あるいは夢を具体化するというもので、自ずとフォーラムの「つなぐ・はぐくむ」というテーマを考えるものとなりました。

総合討論は、フロアーの全員が、配られた紙に意見を書いて掲げながら、お互いに発言していく楽しい交流の時間になりました。

また今回のフォーラムでは、午後に、お茶を飲みながらの展示と交流の場（2102教室）を設定しましたが、エコカフェ、フィールド・ミュージアム、裏山観察会、シオジの森のプロジェクトX、天然酵母パン、木楽舎の積み木、岡部鉄工所の薪ストーブなど、9つの担い手たちの参加を得ることができ、たいへん盛況でした。

なお全体の進行は、加藤大吾氏（アースコンシャス）が見事に務めてくださいました。

（はた じゅん・本学社会学科教員）

都留が気になる
街になりました

静岡県富士宮市 坂東 誠

正直なところ、妻に誘われ事前の知識もないまま出かけたフォーラムでしたが、思いがけず気持ちの良い一日をすごせました。フィールド・ミュージアムという概念そのものが新鮮でした。

私もバードウォッチングを中心にした自然観察会を行っていません。身近にも多くの野生の生物がいることに気づいてもらいたい。「きゃあ、かわいい」が入り口でも良いけれど、鳥や生物たちの生活を学んで欲しいし、これを通じて自然のなかに暮らす仲間たちにやさしく接して欲しいと願ひ努力しています。そんな気持ちがフィールド・ミュージアムのなかには満ちていると感じました。環境破壊は関係の破壊から始まる、という言葉聞いたことがありますが、このフィールド・ミュージアムのなかには興味を抱くということ、知ろうとすること、学び好きになるということ…そうした心が満ちていて、本来あるべき環境—広義の—で、生きていくこと、社会生活を営むこと—を作り上げていく試みをしているんだ、と思いました。

総合討論の最後の質問で、「フィールド・ミュージアムで何がしたいか」に、しばらく「バードウォッチング」とか「インタープリター」とか考えてみました。結局「ひたすら歩いてみる」にしました。今回初めて訪れた都留でしたが、気になる街のひとつになりました。次回時間をかけて訪れれば、きっと暖かく、わかりやすく、出迎えてくれるもの



と期待しています。

フォーラム関係者の皆様ありがとうございました。学生諸君のがんばりと彼らの小麦から手作りのおいしいケーキもありがとうございます。そして遠路はるばるやってきて真剣に聞いていると思ってくださった畑先生を裏切らないよう、私も地元で頑張ります。

(ばんどう まこと・環境カウンセラー)

私も一言

静岡県富士宮市 坂東 英代

自然を守るには人とのつながりと地域の暮らしを大切にすることからはじめよう、というフィールド・ミュージアムの取り組みにとっても共感しました。公平で若い活力のある組織が核となっていることをうらやましく思います。

私は「コーデイネート」という言葉に関心がありますが、フィールド・ミュージアムは、まさに「つなぎ、はくくんだ」たまものですね。このころを静岡県にも広げていけるよう、気持ちを新たにできました。

運営にあられた学生さんのホスピタリティが印象的でした。ありがとうございます。

(ばんどう ひでよ・環境教育インタープリター)



地域は学びのフィールド

鈴木 慎一

地域交流研究フォーラムの会場へ向かう中、なんだか親近感を覚えました。考えてみると身近に里山があり田園風景があり私の働いている大学周辺の環境とどことなく似ていたからでしょう。知多半島は、自然豊かなところでムササビはいませんが、さつねが住んでおり児童文学の『ごんぎつね』（新美南吉著）でも有名です。

神社の木の皮をムササビが食べる原因がどこにあるのかを知ることやムササビを育てあげ最後には野生に帰したといったことを聴き本来の自然を一瞬でもわかった気がしました。また、視点を変えればムササビを育てることをとおして将来経験するだろう子育ての感覚もイメージできる興味深い講演を聴くことができました。

数年前に米づくりに関心をもっていた時期があり1年間で自分が食べる分を収穫するための面積に関心があったのですが、今回のシンポジウムでその土地の地力により収穫量が異なることを具体的にやっとなり理解することができました。今は、米づくりをしている田圃の地力が落ちてきた場合にはどんな対策をするのが気になりはじめています。それにしても地域の方から農業の文化について感覚を感じて欲しいと大学に持ち込んでいただけることは羨ましいです。

休憩中にはフィールドノートのことをお聞きして、大学1年生から大学院生までが50ページにもおよぶ冊子の記事を書いていることに驚きました。さらに年5回発行していると聞いてまたまた驚きました。



フィールドノートでのインタビュー記事をまとめていくなかで、「自分の考えを整理し文書の表現力が付いている」と伺い、密度の濃い経験を積むことができ効果的に幅広く地域で学べていると思いました。このフォーラムには想像していたとおり多岐にわたる分野の方が集まり、テーマをもって議論することでも思いも寄らない考え方に触れることができ刺激でした。このようなつながりのなから地域の課題に対応できるものが生まれてくると思います。

（すずき しんいち・日本福祉大学教員）

フィールド・ミュージアムの まいた種

長谷川 望

私が都留文科大学を卒業してもう5年経ちました。卒業直前に創刊した「フィールド・ノート」に卒論のために大沢フィールドで観察をしたアカネズミの観察日記を掲載させてもらったこともあり、この5年間でフィールド・ミュージアムがどれだけ発展しているのかな、そんな期待をもって今回の地域交流研究フォーラムに参加させていただきました。

残念ながら所用のため午前の今泉先生による基調講演は聞けませんが、午後のシンポジウムはすべて参加しました。私が今勤務している小学校にある明治・大正期の写真の整理の必要があったり、社会科で稲作をはじめとした農業の学習を行うために、地域の農家と連携をはじめたり、私自身がエコクラブ等で自然観察の講師を勤めることが多くなっていたりするので、どの発表も今の自分となんらかの関わりのあることであり、とても興味深く聞かせてもらいました。

シンポジウムに参加して感じたことは、この取り組みを都留からもっと発信していけるといいな、ということですね。どの地域でも地域との連携を考えたときに「都留モデル」として提示できるものになりつつあるのではないかと、そんな感想を抱きました。

私が今住んでいる静岡県富士市でも、市民ボランティアである自然観察の会が市内に何ヶ所かある自然観察フィールドを一括して管理し、小学校などの自然体験活動や観察会等の支援をしていくという取

り組みが始まろうとしています。そこで都留文科大学フィールド・ミュージアムの取り組みを参考にしていきたいと思っています。

今回参加して、センターが発足してからの5年間の取り組みが少しずつ実を結びつつあるように感じました。これからはその「実」から生まれた「種」を他地域へとまいていく、そんな役目もこのフィールド・ミュージアムにあるように思いました。幸い、都留文科大学は全国から学生が集まる大学です。都留から、地域交流の輪が広がっていくことを願っています。

(はせがわ のぞむ・本学初等教育学科卒業、静岡県富士市立原田小学校教諭)



自然に学ぶ

「シオジ森の学校」は、大月周辺の教育関係者や林業関係者、地域住民によって運営されているNPOで、県有林内の〈小金沢シオジの森〉や〈真木ふれあいの森〉を中心に、北都留周辺の森林をフィールドにして、森林体験・環境教育プログラムを展開しています。北都留地域の小・中・高校生および一般市民を対象とし、森の自然に親しみ、森の恵みを活かし、森とともに生きる文化を伝承することを目的として活動しています。地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部

門では、平成17年度よりシオジ森の学校の活動に教員や学生を派遣し、これまでに、のべ50人の学生がボランティアスタッフとして参加しました。学生たちは自然体験や野外で子どもたちとふれあう機会を得るだけでなく、地域の人々との交流を通して地域の自然、文化や産業についてさまざまなことを学んで帰ってきます。ここでは、今年の夏、都留市鹿留^{ししどめ}で開催された「森のキャンプ」に参加した学生の声をご紹介します。

自然や人とのつながりを 深める活動をめざして

―身近な自然を

見つめなおすことからはじめよう―

岡田 淳

シオジ森の学校では「つみ木の王国」や「森のキャンプ」^①「間伐材を活かした椅子づくり」など、さまざまな活動が行われています。そのなかでも私にとって最も思い出深い、「森のキャンプ」について書きます。

このキャンプは私たち学生が企画・運営し、さまざまな活動に参加者のみなさんと共にしました。川遊びでは、最初に川をきれいにしてくれる生きものについて学び、次に実際に川へ入って水生昆虫を観たり触ったりしました。子どもたちは川にたくさん生きものがあることを知り、探すのに夢中になっていました。

夜には、灯りに集まる虫たちや暗闇の中を行動する動物を観察しました。蛍光灯やブラックライトの光にはその場を覆いつくす程の虫が集まっており、参加者のみならず私たちも驚かされました。また暗闇の中、赤外線カメラを使い、巣箱から出てくるムササビを観察しました。それを観ることのできなかつた参加者も、翌朝、近くの巣箱からムササビが顔を覗かせているのを観ることができ、みんなで感動を共有することができました。

食事のときには、参加者が自ら、森にある植物で作った箸やスプーンを使用しました。使用済みの食器は、洗剤の代わりに灰を、タワシ代わりにシユロの



繊維を使って洗いました。参加者はこの体験を通して、身近な自然を生活に役立てることができることや、そのことが自然環境を守ることにもつながることを知ることができたと思います。

参加者のみなさん、なかでも子どもたちはキャンプを通して自然と関わり、さまざまな体験をしただけでなく、家族や私たちとの関わりのおかげで多くの人と喜びや感動を共有するという貴重な経験ができたのではないかと思います。

私はこのキャンプの活動に限らず、シオジ森の学校のさまざまな活動が、地域住民と身近な自然とをつなぐ機会になるだけでなく、人と人をつなぐ大切な機会にもなると考えます。みなさんも私たちと一緒にシオジ森の学校の活動に参加し、身近な自然を見つめなおしながら、「自然」や「人」とのつながりを深めてみませんか。

① おかだ あつし・初等教育学科3年

自然に親しむビオトープづくり

西 教生

都留文科大学附属図書館のビオトープでは、チョウのための花を育て、トンボのための池を整備しています。この池では山梨県産のメダカが繁殖しています。また、オニグルミやホオノキ、シラカシなどの稚樹が植えられており、そのまわりの草刈りも定期的におこなっています。この木が並木として育てば、周辺の森から鳥がやって来るでしょう。

これらの作業は多くの生きものたちとの出会いの場所を作るための準備ですが、作業中も生きものたちとの出会いにあふれていました。エゴノキの葉でオトシブミを見つけ、アーモンドは花から実になるまで継続的に観察しました。草地では食物を探すムクドリやキジバトの姿を見つけました。

また、身近な生きものに目を向けていたかどうかとビオトープで育てたヒヤクニチソウやブッドレアなどのチョウが蜜を吸いに訪れる植物、それに池のメダカの一部は富士急行線の都留文科大学前駅で展示しています。地域交流研究センターの入り口では、ビオトープに移植するための「裏山の樹木」の苗作りが進行中です。このような作業を通して地域の自然と親しみ、生きものの暮らしを知っていききたいと思っています。

(にし のりお・社会学科大学院2年)

活動を広く伝えたい

伊藤 希

春に土を運び、花の種を蒔きました。発育が遅れる、台風がくるなどの困難を乗り越えて秋にはヒヤ

附属図書館ビオトープ

本学附属図書館が開館した2004年4月から、フィールド・ミュージアム部門ではビオトープ（「生きもの生活場所」という意味）の維持・管理の作業を続けてきました。このビオトープの緑が、自然と親しむ入口ともなり、図書館で本を読む環境づくりにも貢献するという考えのもと、誰もが親しめるチョウやトンボ、鳥などと出会える空間づくりを目指しています。今年度、ビオトープの世話をした学生に作業の感想を記してもらいました。ビオトープの取り組みについては、今後も定期的に報告します。



クニチソウとコスモスが咲いてくれました。ビオトープを歩きながら花を眺めてくれる人もいました。花が枯れてしまったあとは次の年に向けて花の種を収穫します。ビオトープと地位交流研究センター入口でコスモスやソバ、ニラなど計5種類の種を収穫しました。今年のビオトープは新たな仲間たちが目を楽しませてくれることでしょう。

夏休み明けに池に雨水を流す側溝から絵の具を流し込まれ、池の約半分がピンクに染まってしまったということが起こりました。近くの学生がポスターを作っていて、池につながっていると知らずに側溝で筆などを洗ってしまったそうです。水を掻き出すことで、池の水は元に戻りました。メダカや貝のなかには死んでしまうものもありました。その一方で、この苦しい状況でも元気に生き延びたものもありました。今まではビオトープの環境の整備に力を入れてきました。今回のことからビオトープがどういう場所なのかを知ってもらう取り組みも大切だと実感した1年でした。

(いとう のぞみ・社会学科3年)



地域に交流の時間と空間を生み出していく

2007年12月14日

フィールドミュージアムカフェの出発



フィールドミュージアムカフェ 第1回—小形山の感想

山本 由樹恵

このプロジェクトに関われてよかったです。あの空間を家と呼べるようなあたたかい雰囲気につながり、参加者を家族と呼べるようなぬくもりを感じました。お年寄りがいて、若い人がいて、田舎で育った目があって、都会で育った目があって、いろいろな価値観が交流できる場。もし、それが本来の家庭・家族の役目といえるなら、会場となった小形山2269はやっぱり家だったと思います。

ゲストとして市外から来てくださった竹越さんの話を聞きながら、前の方に座っていた地元のおばさんが共感するように何度もうなずいていました。昭和の話をしているときは、瞳が潤んでいるように見えました。

若くて嫁いできて、養蚕や農業をしながら長年この土地に住んできた人は、その地域に住まざるをえなかったわけでもあります。そこによそ者である教員・学生、または竹越さんのような外からの人が、第三者的な位置からこの地域に来る。そして自然環境やムササビ、行事、祭礼を見たり、触れたりして、素直に「素敵だ」「いいところだ」という思いを地元の人に伝える。そういうことで、ほんやりでも、この地域に住む人たちに「この田舎に住んでよかった」とカフェの場で思ってもらえたのではないのでしょうか。もしそうだったら、これは私自身嬉しいぞと思いました。

今後のネットワークづくり、地域における自己（アイデンティティ）の再確認の場の提供は大切だと

思います。一番動けるのはきっと学生だから、学生スタッフを増やしつつ、日常的に地域に出て交流をしようと思います。

その点、大学・学生主体で農業をするということは、地域のひととの交流のカギになり得ると思います。

（やまもと ゆきえ・社会学科1年）

「動・はぐまら」…Café＝つながり

肥沼 健一

フィールドミュージアムカフェが動き始めました。その記念すべき1回目が私の家で行われました。私のお借りしている家は今年で築103年になる家で、むかしは養蚕業をしていたために家全体が大きな作りの古民家です。

家の周りには野菜を買う場所や日用雑貨を買う場所がなく、お世辞にも便利の良いところはいえません。そのためか、家の周りには数軒の民家があるだけで静かな土地です。そのような場所に私は一人で生活をしています。

1回目のフィールドミュージアムカフェでは大学生や都留に暮らす若い人から高齢の方まで、さまざま



目的

- 都留フィールドミュージアム構想の一角として、「ささやかなつながりの時間と空間」を持つことによって「ミュージアム」としての意識を醸成させる。
- 「ECO」とは都留における自然と人、暮らしの「繋がりと循環」と定義。「カフェ」とはつながりの場と時間のことを意味する。
- 都留で行なわれてきた、または行なわれている「まちづくり」「アート」「有機農業・パーマカルチャー」「自然教育」まで、さまざまな主体による活動の有機的な繋がりを促進する。

内容

- 都留市において「まちづくり」から「アート」「有機農業」「自然教育」を実践されている方々がゲストスピーカーとなり、その実践や実践に込めた思いを語る。
- 開催テーマに沿った「その道のゲスト」を迎えて、意見を交換しあう。
- ミュージシャンやその他、アーティストを招く。
- 飲み物、お菓子、軽食を持ち寄る。または実費で提供する。
- 当日、個人商店（ブース）を出す。
- 実施場所は市内のさまざまな場所、持ち回りとする。

まな方が集まりました。カフェを通し、普段は静かな土地や家とその日は多くの人が集まり、共に食事をし、お互いの話しをし、さまざまな時間を共有しました。またカフェを通し新しい出会いもありました。一回目のカフェはとても楽しい時間、刺激的な時間でした。カフェには私の家の大家さんも参加しており、大家さんが帰るときに「先祖が喜んで」と言葉を下さったことも、私には印象に残っています。

参加者の中からは、家族内でのカフェの話から、地域のむかし話に発展し、世代間の思い出を話したとの声も聞きました。フィールドミュージアムカフェの種が広がっているのを私は感じていきます。

このフィールドミュージアムカフェはこれからも続いてゆきます。カフェを通し、普段は行かぬ地域に人が集まり、音楽や話しを聴きながら同じ時間を共有し、新しく出会った人と話しをする。さまざまな人が集まるカフェで、地域の過去や地域に対する思いを知ることができます。そこから未来を考える場が生まれるのではないかと私は期待を抱いています。

私は3月で卒業です。カフェに参加できるのは次の2回目（3月18日）が最後になりますが、時間の都合がつかずならばフィールドミュージアムカフェを見に行きたいと思うくらい、今後のカフェの活動が楽しみです。

時間がある方は是非一度フィールドミュージアムカフェに参加してみてください。

（こいぬま けんいち・社会学科4年）



オープンカフェで小さな写真展を開く

岩間 美千子

八朔祭りに催す当店のオープンカフェに、歩き疲れたお客さまが立ち寄りてくださいいます。家族や友人、恋人たちが楽しげに語らっています。その話題の一つになればと、イタリア政府観光局、同貿易振興会から展示物を拝借して7年ほどイベントを行っていました。しかし、次第にテーマ性の無さ、イタリアである必然性に疑問を感じるようになり、今泉吉晴先生にご相談し、北垣憲仁先生のご協力を得て古い地域の写真をもとに当時の記憶を掘り起こしていく小さな写真展を開催するに至りました。幼いころはまだ日常にカメラを向ける時代ではなかった、あっても大火で焼いてしまったという方が多く、まだ2年目のフィールドは非常に狭く写真探しは大変です。

初回は「私の思い出」、2回目は昨年は「昔の遊び場」をテーマとしました。昨年は写真枚数が増えたこと、展示に地図を併用していただいたこと、露天商の数が減ったことなどが幸いし多くの方の目にとまったようでした。嬉々として青春のころを語る大人、珍しげに写真に見入る子どもたち。音の響きからでしょうか、とくに「ピーヤ（鍛冶屋坂の導水管があるあたりを「ピーヤ」と呼んでいました。この名前の由来はわかりません）」に興味をもつ子どもが多く、行ってみたいそうです。ある小学生からは、ピーヤについていろいろ調べ、自由研究として夏休みにまとめたので協力お願いしますとの申し出がありました。もちろん喜んでお手伝いします。

そろそろ、第3回八朔祭りの協賛イベントにむけた写真探しをはじめの時期になりました。今年の写真の物語はどんなふうになるのでしょうか。ご覧ください

人・町・自然をつなぐ地域交流研究

ブオーノ写真展示

都留市高尾町通りにある商店街に「ブオーノ」というパスタ専門店があります。この店では、地域の食材を活かしたパスタ料理を工夫しています。

2007年9月1日、都留市の八朔祭りにあわせてこの店でミニ展示を開催しました。今回で2回目となるこの展示では、地域の子どもの遊びをテーマとした写真

が紹介され、雨にもかかわらず多くの市民との交流が生まれました。

地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門と共同で展示を企画した店主の岩間美千子さんに展示の様子、今後の期待などを記していただきました。

さった方はどのような話をしてくださるでしょうか。とても楽しみです。写真とその資料を提出するのみではおまかせで申し訳ないのですが、甘えさせていただき今後も写真展を続けていきたいと思えます。八朔祭りは9月1日です（ただし今後、八朔祭りは9月の第一日曜日になるかもしれないとのことです）。露店の立ち並ぶ通りにぽっかり空いた空間でみなさまをお待ちしています。どうぞお立ち寄りください。

編集部註・岩間千恵子さんの地域の食材を活かしたパスタ料理については『地域交流センター通信』2号に関連記事があります。

(いわま みちこ・都留市在住、「ブオーノ」店主)



富士急沿線ミュージアムの取り組み

フィールド・ミュージアム部門では、富士急行株式会社と連携して富士急行線都留文科大学前駅の構内での展示活動と花壇づくりに取り組みました。展示は、待合室の一角にある掲示板を利用して大学キャンパス周辺の自然を

中心に紹介してきました。花壇は、駅が「自然に親しむ入口」となるようチョウが吸蜜に訪れる花をプランターに植え、構内で育てました。今後も駅と地域、駅と大学をつなぐような活動に取り組む予定です。



話しかけてくる自然に耳を傾けて

大下 友香

駅の待合室の一角に掲示板があります。その掲示板では大学周辺の自然を紹介しています。おもな展示の内容は大学周辺の生物・植物の様子や裏山の様子など、大学構内や大学近辺を歩いて発見した自然の変化についてです。この自然の移り変わりを、駅の利用者に提示し、できれば興味をもち実際に歩いて見てもらいたいと展示を続けています。私もこの展示に取り組むために、夏から秋にかけては構内の木の実を、冬には葉が落ちていく並木道や裏山の様子を実際に歩きながら、見て回りました。

大学構内や周辺には多くの種類の植物が生えていて、その植物たちがほんの少しのあいだに紅葉したり落葉したりと、いろいろな表情をみせてくれます。大学にはこんなにたくさん植物が溢れているんだと改めて感じました。一つひとつ名前をつけてまわると大学周辺が植物園になりそうです。歩き回るようになってから、自然に木や植物へ目がいくようになりしました。お気に入りの木もあります。実が熟れてきたなあと気づいたり、まだこの木は葉が落ちないんだと分かったり、それぞれの植物がもつ独特のリズムが視界のなかに飛び込んできます。今まで見たつもりでいた景色。道や建物や遠くの山は見えていたけれど、実は手に届く範囲の自然までは見ていなかったんだとハッとしました。自然はいつでも話しかけてきます。その声に耳を傾ける面白さを知りました。

この展示は1ヶ月ほどで入れ替えます。自然の今をより早くお伝えできるように、これからも自然のサインに敏感でいようと思います。駅をご利用のさ

いは、ぜひ展示にも目を向けてみてください。

(おおしも ゆか・比較文化学科4年)

都留の魅力伝える駅展示づくり

川崎 真貴子

昨年の春、私は都留文科大学前駅での展示活動に参加することになりました。この展示は、都留のまちやキャンパスにある自然の魅力を駅の利用者に伝えるとともに、親しみを持っていただこうというものです。

例えば山梨県産のメダカが泳ぐ水槽。じつは野生のメダカは数が非常に少なく、絶滅の危機にあります。また、裏山にたくさん落ちている木の実。手にとってみると、リスやアカネズミの食痕が残っており、その面白い形から彼らが器用に食べていることがわかります。ホームには蝶が大好きなオカトラノオやヒヤクニチソウ、ブッドレアなどの鉢を置きました。暖かくなったら蝶で賑わう場所にしたと願い「蝶の庭」と名付け、看板を掛けました。

駅で電車を待つとき、駅に降り立ったとき、一人でも多くの方がふとそこに都留の自然を感じることでできれば嬉しいです。文大前駅を都留の玄関口としてまちや森への誘いとなるよう、これからも活動を続けていきます。

(かわさき まきこ・比較文化学科4年)



「奥隆行写真コレクション」の紹介

都留文科大学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門では、市内在住の奥隆行氏が蒐集・複写してこられた地域の貴重な写真4058枚の整理とデジタル化作業を終えました。

また、これら「奥隆行写真コレクション」は、今後フィールド・ミュージアム部門が管理・活用にあたることになりました（『地域交流研究センター通信11号』に関連記事があります）。

今回はその写真資料の一部をご紹介します。



水車と水車小屋（戦前に撮影されたもの）



鹿留川での水泳風景（戦前に撮影されたもの）



カジカ突き（1958年に撮影されたもの）



桂川の鮎漁（1964年に桂川にて撮影されたもの）



大幡川の洪水の惨状（1907年に撮影されたもの。谷村町五十嵐写真館の台紙にこの写真は貼られていた）



八朔祭典大名行列（1921年撮影。八朔祭典大名行列に関してはもっとも古い写真）

地域交流センターフィールド・ミュージアム部門は、2007年秋、都留市立図書館において、同館との共催による「谷の町・史の里 まちの記憶 写真展」を開催しました。

秋の読書週間に恒例となった市立図書館での企画展もこれで3回目となりました。今回の企画は、前年の「谷の町・史の里 図書館のあゆみ展」に続き、「まち」の歴史・文化をテーマに、地域で撮影された写真（奥隆行写真コレクション）を使って戦前戦後のまちの様子を概観するというものです*1。

なお、この写真展は奥コレクションのデジタル化作業の終了（16頁を参照）に伴い、写真蒐集に協力された多くの方々をはじめ、市民の皆さんに成果を報告する場として企画しました*2。

奥氏の写真コレクションにはカメラが普及する以前の写真が少なくなく、またそのテーマは、風景、人物、建物、文化、自然等々、多岐にわたり、二度と見ることでできない貴重な景観・情景が数多く残されています。劣化の進んだものも多々ありますが、デジタル化し、データベースを作成したことによって、散逸をふせぎ、永く保存し広く活用することが可能となりました。これらの写真は、聞き書き等と同様、地域の自然や人びとの暮らしを知る上で非常に大切な資料であり、また、このように人びとの記憶を記録することは、フィールド・ミュージアム部門の課題でもあると思います。

今後の写真の管理と利用については、有効活用の検討とともに、複製権・肖像権等、解決すべき著作権処理の課題が残されており、ていねいな扱いが必要と考えています。

なお、今回の企画展は、図書館来館者に大変好評

フィールドミュージアム部門

市立図書館との共催事業

「谷の町・史の里 まちの記憶 写真展」

2007年10月27日～11月9日



コレクション紹介：写真コレクションとデジタル化の様子を展示



「谷の町・史の里（上谷国道沿い）」（昭和初期）

であったとのことでした。「なつかしいまちの記憶に触れ、活力を得た。」などの感想も寄せられています。こうした市立図書館との連携による事業は、大学の活動を市民のみなさんに知っていただく機会にもなり、また交流を生み出す場にもなります。今後とも地域の大学としての特性を活かした取り組みを継続していきたいと思います。

* 2 全4,058点の写真を取録したDVD、及びインデックスプリント、コレクションの一部を納めた写真アルバム、キャプションの記述に参考にした書籍などを展示した

* 1 閲覧室各所にテーマごとに写真を展示。まちが誇る歴史・文化的景観（機、倉、八朔、七夕、都留大旧校舎、高等学校ほか）、戦後復興期から現代まで各時期を象徴する写真（谷村大火、市営住宅、中央道開通、YLO会館、郵便局ほか）、戦前、明治・大正の写真（八朔、家中川、馬車鉄道ほか）

触れてわかる、 地球のメッセージ

石井 壘

「social菜園's club」ヘソーシャル・サイエンス・クラブ」は平成元年、都留文科大学生社会学科におけるゼミ研究を発端とし結成された畑で野菜を作るサークルです。

今となつては大勢の仲間たちと共に和気あいあいと野菜を作っています。私がサークルに入った当初は、新入部員はなんと自分一人だけ。2年生は0人。3年生は畑に来ない。つまり誰もいない。農具の置き場は教えてもらったものの鍬の使い方もわからなければ、畝の作り方もわからない。こんなことでうまくやっていけるだろうか、と不安に駆られたこともありました。

しかし畑は待った無しです。植え付けの期間を逃せば夏・秋季の収穫は見込めません。ええい、一か八かやるだけやってみるか、と隣の畑で野菜を作っている方に教えていただきながらやっこの思いでジャガイモの種芋、サツマイモや枝豆などの苗を植えました。

いもと豆を無事植え終わりほつとしたのも束の間、困ったことが次々と起こりました。

まずは枝豆です。苗にカメムシのような虫がびつしりついたかと思うと、凄い勢いでこげ茶色にひからびてしまったのです。殺虫剤は使えません。あつという間に十本の苗は全滅しました。

そして笹。彼らは地中深くに根を張り、どれだけ深く掘っても根っこから引き抜けないのです。新た

休耕地を利用した食・農・ 循環の学習

に笹が地表から顔を出す度のため息ができました。除草剤も使えません。

農薬を一切使用しない野菜作り、それこそがこのサークルが取り組んできた大切なテーマ。それを実践する第一歩だからです。

農薬を撒けばきれいな形の野菜ができるかもしれませんが。虫は寄り付かず、草取りの手間だって省けるかもしれませんが。しかしそれは畑の命と引き換えに得られる利那的な実りであり、省けた手間の分だけ自然(畑)が傷ついているのです。

このサークルが取り組んできた大切なテーマとは何か。それは「自然との持続可能なコミュニケーションを図る」ということです。このことは、まさにこれからの私たちの生活に直結する緊急的な課題ではないかと思えます。

畑という身近な自然の入り口で見えたもの。それは自然と共に生きてゆくための小さな道標でした。

(いしい るい・社会学科1年)



無農薬野菜づくりの 学習会をもつ

宮崎 ことり

こんにちは、social菜園's clubです。私たちは無農薬野菜を栽培しつつ、地域の方々との交流をはかることを目的として、普段は畑で野菜を栽培したり、またその野菜を使ってみんなで料理をしたりしています。しかし冬の間は畑の土が凍ってしまっていて思うように活動できません。この時期をうまく春に繋げるためにということ、さまざまな視点で、農業に携わっていらつしやる方々からお話をいただくことにしました。

今回は、自然農法で自給的な農を实践なさっている方のお話でしたが、今回は少し視点を変え、有機農業の、事業としての成立可能性やその困難についてお話をうかがいました。

講師となつてくださったのは、都留市の有限会社「ストローハット」の代表取締役、志村浩弥さんです。



「地球と人に優しい農業―農業から仕事を起こす―」というテーマでお話をいただきました。志村さんは、消費者には体に良いものを食べてほしいという思いをお持ちで、環境にも優しい無農薬野菜の栽培に企業として取り組んでおられます。

EM (Effective Microorganisms = 有用微生物群) を使った農業のお話では、EM を使って肥料代わりに散布するとよいことや「EM ストチュー」という忌避剤を作り散布すると効果があることなど、EM の実用性を感じました。私たちが虫には悩まされていたので、学習会の中では忌避剤の成分やその調合の仕方など、質問が集中していました。

この他にも、インターネットでの野菜販売、市場から見た無農薬野菜の状況などについてのお話を伺いました。野菜の卸売り市場の仕組みを説明下さるなかで、有機・無農薬野菜を通常の流通の仕組みに乗せることがいかに難しいかも知ることができました。私たちは自分たちで作っている野菜以外はお店で買うので消費者側ではありません。企業の方から見た農業、市場での無農薬野菜の流通は、普段ほとんど知ることがないので、こうした視点からのお話は大変新鮮に感じました。

これらのお話を通して、無農薬野菜の素晴らしさを再認識するとともに、今日まで大変な努力をして数々の苦難を乗り越えておられるということを知り、考えを実行することや行動を見直してみることがいかに大切かひしひしと感じました。実際にsocial菜園's clubの活動が本格的に始まるのは春からです。今回いただいたお話を最大限に活かしてこれからの活動に取り組んでいきたいと思っています。

(みやざき ことり・初等教育学科1年)



稲作 稲作と麦づくりの実践

「フィールド・ミュージアム」では市内十日市場の中屋敷フィールドで稲作、麦づくりに取り組んできました。この取り組みは、柄杓流川^{ひしゃくながしがわ}と山に挟まれた田の一部を復興しようとする試みの一つです。地主の渡辺宗男さんにご指導いただきながらの試みも今年で3年目となりました（本紙9号と11号に関連記事があります）。

初年はイノシシ、次の年はサルに収穫前の稲を食べ尽くされました。ついに今年度、米、麦ともに無事に収穫できました。このフィールドでは、今後も稲作、麦作りの試みを続け、大型獣との共生のあり方も模索していきたいと考えています。

2度目のチャレンジ

前田 恵子

中屋敷フィールドで麦を作るのは2度目のことです。前はみごとにイノシシに収穫前日に食べられてしまいました。

今回の麦づくりは2006年11月23日に麦を蒔くことから始まりました。いつもお世話になっている地主の渡辺宗男さんに教えていただきながら、作業を進めます。麦をつよくするために芽を踏む麦踏み、草刈りなどの工程を経て、翌年の6月24日に無事収穫をむかえることができました。

一面焦げ茶色の畑のなかに入り、鎌で刈っていきます。根元からザクッと、一束の量はできるだけ均等に。何人かでおこなうときは方向をそろえて。収穫作業において麦は稲と違うところがいくつもあります。「馬」にかけて干す工程がないため、置き方ひとつとっても差がありました。麦の穂が均等に日に当たるように置くのがポイントです。渡辺さんの作業一つひとつが私たちの教科書になっていきます。

干した後は脱穀、製粉が待っています。10月9日に渡辺さんがもつ洗濯機のような脱穀機にかけ、上野



原市にある小俣製粉所にもっていくことにしました。

郡内でも数少ない製粉所のひとつ、小俣製粉所を営んでいるのは小俣トシ子さん（81）。50年以上もなさっています。住宅街にひっそりある木造作りの製粉所の建物のなかには年季が入ったいくつもの機械がありました。30キロ以上ないと製粉できないそうで、分銅のついた秤ではかってもらいました。私たちがもっていった麦は8貫ちよつと（約30キロ）。麦を手にとった小俣さんは私たちに、初めてにしてはまあまあいい、とおっしゃってくださいました。長年にわたって製粉をしてきた小俣さんは、麦を一目見ただけでその状態を見極め、粒の大きい麦にするためのアドバイスをくださいました。とくに麦踏みは重要だということがわかりました。

できあがった粉は真っ白でさらさらしています。その粉でうどんやパンを作って食べてみると、市販の物に比べ茶色がかっていて、もっちりしています。一から作ってきた食べものには不思議と愛着が湧いてきます。今回の経験で得たひとつひとつの「知恵の教科書」を活かして、今年もまたチャレンジしたいと思います。

（まえだ けいこ・本学研究生）





稲刈りを通して 知恵を学ぶ

上原 夏美

4月に苗床をつくり7月に植えた稲をついに刈るときがきました。

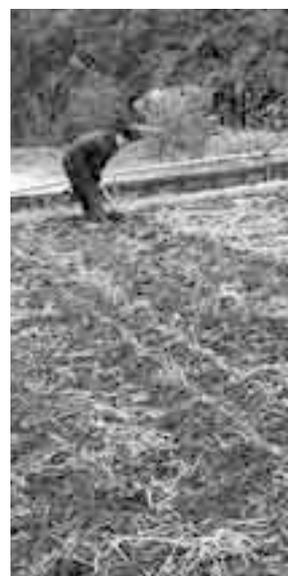
地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門で『フィールド・ノート』を編集しているメンバー10人と、この土地の地主である渡辺宗男さんが水田に集合しました。

上着を脱ぎたくなるような10月29日。連日の晴天のおかげか、田んぼも少し湿っている程度でした。

稲刈りはこれまで実家で何度も手伝ってきましたが、鎌を使って一把づつ刈り取っていくのは初めてのことです。

鎌の使い方のポイントは、刃をいかにスライドさせるかだと思います。無理に刈ろうとすると稲が根っこごと、ごそつと抜けてしまうのです。鎌の切れ味のせいかとはじめは思っていました。隣で刈る渡辺さんの手元からはザクッ、ザクッ、ザクッ、バサッ、と一定のリズムで刻まれる小気味よい音が聞こえてきます。「力なんか全然要らん」。渡辺さんの言葉通り、鎌に慣れば慣れるほど腕から力が抜けていくのが分かります。

刈り取りが済んだら、次は丸太で組んだ「馬」と呼ばれる柵に稲をかけていく作業です。5、6把ほ



どの稲を縄代わりの藁でまとめ、「馬」に引っ掛け、干していきます。この稲を藁でまとめる作業がなかなか難しい。渡辺さんの手元を見てみると、藁で縛るといふより巻きつけて押し込むようです。それでもわからずゆっくりやってみましたが、私にはどうしたらこのように手際よくできるのかわかりませんでした。

それに比べて稲を干すのはとても簡単には感じました。まとめられた稲の束を2つに分けて丸太に引っ掛ければいいのです。途中、稲を全部干すには丸太の長さが足りないのではないかと心配になり、少しつめて藁を掛けたら、「それじゃあ、乾くのが遅くなる」と渡辺さん。最後には稲はきちんと丸太に収まりました。

私たちが稲を縛って干すという一連の作業をおこなうあいだ、渡辺さんは稲をまとめながら、水路の草取りまでしていました。それでもなお、稲をまとめるペースは私たちと変わりません。稲がすべて干される頃には用水路の雑草もすっかりなくなっていました。

時間にして2時間ていどの作業でした。一仕事終え、やれやれと思った私たちに、「ごころうさん」と声を掛けた渡辺さんは、ウォーミングアップ終了といった感じで次の仕事へとさっそうと出かけていきました。

(うえはら なつみ・初等教育学科3年)

都留のお弁当づくりプロジェクト

山本由樹恵、後藤由貴子、一木則子、
芦澤操香、山本絵理菜、横澤佳奈

7月にメンバー6人で最初に集まったときは、「お弁当なんて4、5回の活動で簡単にできる」と思っていました。夏休みが明け活動を始めた当初の方針は、地元の人との交流を通して郷土料理を伝授してもらおう、というものでした。しかし、いざ活動を開始して情報収集を始めると、お弁当作成予定の冬季に使える都留の野菜や野山の山菜も少ないことや、



社会学科環境・コミュニティ創造専攻

環コミ学生1年生による 弁当づくりの実践

社会学科環境・コミュニティ創造専攻では、一年次の前期に「フィールド体験」という授業で、宝地区の自然を題材とした環境教育、都留の商店街関係者によるまちづくり、農を軸とした観光振興の取り組みなどを、体験や調査を交えて学習します（詳細は『地域交流センター通信』12号14頁参照）。

後期は、これらの学習を発展させるものとして、学生自身が探求課題を設定し、仲間を募って自主的なグル

ープ学習を展開する「プロジェクト研究」が行われました。初年度は、「小動物観察プロジェクト」、「桂川水質調査プロジェクト」、「自然から学ぶコミュニケーションプロジェクト」、「都留のお弁当づくりプロジェクト」の4つのグループがこの自主企画に挑戦し、地域での学びを一層深めました。以下ではその一端を報告します。（田中夏子）



そもそも都留特有の郷土料理がすぐには見当たらないことがわかり、活動の難しさを知りました。しかし6人で共有した「自分の足で都留を歩いて、都留を知る」というベースのもと、地元の人から人へ手当たり次第にお話を伺うことで多くの情報を得ることができました。

こうした過程を経て、ツル・弁当も変化してきました。「郷土料理を集めてお弁当をつくる」方針から、「都留市でとれた食材（はずせない都留ならではの食材として水掛菜やわさび）をつかったお弁当」に変わってきたのです。また、都留で「食」に関わる活動や仕事をしている方々の話をお聞きしていくなかで、「食育」というテーマについても、深く考えるようになりました。

試作の段階でも基調となったのは、やはり地域の方々のアドバイスでした。郡内地方の食生活におい

森の勉強会

社会学科後期授業「特別講義Ⅰ」（泉桂子担当）では森に親しむことを目的として、身近な森林を歩いたり、そこでネイチャーゲームなどのアクティビティを行ってきた。受講者の多くは毎日学校に通いながらもその近辺に多様な森があることについてほとんど知らず、驚きを感じたようである。この講義の総仕上げとして授業最終回、外部講師をお招きし、森林やそれに関わる公務員の仕事についてお話を伺った。講師は

お二人の技師であり、大学に隣接する合同庁舎内にある山梨県富士・東部林務環境事務所からお越しいただいた。講義の内容は公務員試験の受験勉強から郡内地域における学校林活動まで及び、有意義な1時間となった。講師の方はまだお若く共に女性であったことから、学生にとっては自らの進路選択を考える1つの刺激となったことだろう。

「森に関する学習会」に参加して

桜井 明子

「山梨県の面積の78%が森林で…」という言葉が都留市に暮らすようになってから頻繁に聞くようになった。私たちの暮らす大学周辺も山ばかり。私がそれを実感するのは趣味で山を登るときだ。私のような登山者や、動物に会いに裏山を散策する人はいても、私たちの日々の暮らしは山と無縁になっている。山に入るたびに感じるささいな疑問―この山は誰が手入れをしているのか、伐採された木はいったいどこへ行くのか、その木が私たちの日々の暮らしとどのような関係があるのだろうか、ということ―を解決したい、とずっと思っていた。

「山で働く人」のお話を聞けるといっているので今回の学習会に参加した。先生は山梨県の林業技士として働く長谷川技師と田中技師。二人とも女性である。参加した学生の多くが教員、公務員志望だったため、山梨県の林業職試験の概要と「学校林」について説明してくださった。



北都留・南都留の87の小・中学校のうち18校が学校林を持っている。現在は「総合的な学習の時間」などを利用して子どもたちが山に入って遊んだり、植樹をしたりする。私にはそのような経験がないため、学校林のある小・中学校生活をうらやましく思った。森林は当然手入れを必要とするが、学校の先生たちが時間を十分にとれず、荒れたままになっている学校林も多いという。

子どもたちが山を身近に感じるためには、先生だけでなく保護者の方や、実際に山で働く人の助けが欠かせない。子どもたちは、山と暮らしが結びついてきた頃の知恵を年配の方に教わるができる。それは子どもたちにとって「生きた学び」となるに違いない。学校林は「森林環境教育の場」という言葉だけでは表せないくらいたくさんの可能性を秘めているのだ。

学習会へ参加することで冒頭の疑問の解決には至らなかったが、森林に関する知識をもち、技術を学んでいくことの重要性を感じた。

光ファイバーを使った 双方向遠隔教育

東桂小学校との 遠隔教育プログラム

杉本 光司

都留文科大学の地域貢献の一つとして取り組んでおります、市内小中学校との遠隔教育システムのなかで、これまで都留第二中学校にしか整備されていなかったインターネットを利用した遠隔教育機器を、これまでの実績により、今年度は東桂小学校に整備し、利用できるようになりました。

そこで、東桂小学校の情報教育担当者の長門知広先生（初等教育学科卒業生）が中心となり、学内で検討して頂いた結果、5年生と本学の中国からの留学生との交流授業の希望が寄せられました。早速、「国際交流室」と協議した結果、留学生からの協力も得られることになり、実施に向けての準備が始まりました。

5年生の準備時間も考慮し、実施日を平成20年2月15日（金）としました。大学の通常授業は終了している時期にも関わらず、6名の中国人留学生、映像・音声継に協力してくれた3名の情報メディア演習受講生の協力もあり、これまでの遠隔教育とは違った新しい交流プログラムを実施することができました。

当日のプログラムは、9時40分～10時25分が5年1組、10時50分～11時35分が5年2組、と2回の授業を実施しました。それぞれ45分の授業内容は、子どもたちからの挨拶、留学生自己紹介、質問コーナー、お礼のことばで構成されており、留学生への質問に関しては、前もって子どもたちが授業の中で調

べて用意してありました。

それぞれの質問も、両クラスとも学校、文化、産業、食、自然など多岐にわたり、「中国の有名なお茶は何ですか?」「北京オリンピックについてどう思いますか?」「日本に来て驚いたことは何ですか?」「給食では何か出ますか?」といった、子どもたちの目から見た中国に対する素直な質問がたくさん寄せられました。

これらの質問に対し、留学生たちも一生懸命に日本語を使って、それぞれの質問に丁寧に答えてくれ、終了後も「とても楽しくて有意義な時間がもてた」と感想を寄せてくれました。

また東桂小学校の児童、教師たちにも好評であり、「中国の色々な話しが聞けて楽しかった」「新しい授業で良かった」「中国のことが良くわかった」などの感想が子どもたちから寄せられました。

（すぎもと てるじ・本学教員・情報センター）



地域交流研究センターの 拠点ができました

topix

センター拠点

1

地域交流研究センターの施設の整備が今年度進められてきました。コミュニケーションホールの地階の一部が当センターの拠点となります。今後、小さな会議ができるスペースや、地域の写真などを蒐集・保存・公開していく「デジタル・アーカイブ」、地域の小中学校などで活用していただく標本資料の収蔵室などの整備を進めていきます。この拠点の一室では、今年度当

初よりフィールド・ミュージアム部門が発行する『フィールド・ノート』の編集機能も、活動を始めました。編集に携わる学生はもとより、地域の方々、本学の教員も打ち合わせなどで活用しています。センター入口には小さなビオトープをつくるなど、誰もが気軽に自然に親しむことができる試みも始めました。



「縁側」のような 存在に

小宮 正廣

厳寒の暮れ、地域交流研究センターを訪ねました。『街かど情報TSURU』のことを『ワールド・ノート』で紹介したいと学生から依頼があったからです。

取材を受けながら「焼芋」をよばれました。「観察小屋の庇を作りながら、焚火の熾（おき）で焼いたんです」という。じんわりゆっくり焼けたサツマイモの甘さは格別で体の芯まで暖まりました。編集部のHさんは、とりとめない取材の思い出話に耳を傾けてくれ、ミニコミを始めた20年前の初心を思い起こさせてくれました。

季節折々、文大生が丹念に足を運び綴る『ワールド・ノート』は、焼芋のような「青春の遠赤外線」に満ちています。この雑誌に心を暖められる人が、ちよつとずつ増えることを望んでいます。

子どもの頃（昭和40年前後）、近所の縁側（「いしばしのえんがわ」と私たちは呼んでいました）は遊びが始まるプラットホームのような存在でした。内と外の営みがホンワカ交わる、「縁側」のような地域交流研究センターに

なっってほしいと願っています。

（こみや まさひろ・都留市在住、村松新聞店勤務
『街かど情報TSURU』編集担当）

居心地のよい 空間づくりを 心がける

長谷川 涼香

本学のコミュニケーションホール地下1階にある地域交流研究センターの入口には、チョウが吸蜜に訪れる植物を植えたプランターとメダカの池があります。ここでは附属図書館のビオトープに移植する植物や富士急行線の都留文科大学前駅に展示する植物も育てています。

メダカ（この池では山梨県産のメダカが育てられています）の池には稲が植えられ、稲の生長を語り合ったり、池の前の「メダカの赤ちゃんがいます」の看板に足を止めて水面に目を凝らす親子や学生の姿がみられるようになりました。

植物の世話をしていると、道行く方が話しかけてくださいます。これも小さな交流の一つだと私は思います。ささやかな試みですが、これからも多く

の人に自然に親んでもらえる場所にした。そんな想いを込めて魅力ある庭作りに取り組んでいます。最近では製材所からいただいた木材を使い、プランターや展示台を作りました。春になればこの庭に惹かれて、さまざまに生きものたちも集まってくることでしよう。

私は、このセンターの一室で『ワールド・ノート』の編集作業を行って

います。そして、みなさんが気軽に訪れてくださるよう入口のビオトープの世話などを編集に携わる仲間とともに取り組んでいます。これからもセンターが多くの人との交流の場となるように、心地よく感じられる空間、雰囲気作りを心がけていきたいと思っています。

（はせがわ すずか・国文学科3年）



「特色ある大学教育支援プログラム」 (特色GP) に採用されました

佐藤 隆

「地域を基盤とした教師養成教育モデルの開発―学習支援を通してへ子ども体験」の深化をめざす学生アシスタント・ティチャー・プログラム」が、今年度、文科省・大学基準協会の選定する「特色ある大学教育支援プログラム」の一つとなりました。

このプログラムは、都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティチャー（SAT）を派遣し、学習支援と、「学力不振」「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を学生に体験させることにより、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力をもつ教員養成の深化・発展を図るものです。

また、この事業を通して大学と小中学校との協力・連携を強めるとともに、大学と学校現場とが共同し、地域をベースにした実践・研究を進展させることをめざしています。これらの運営に

あたっては都留市SAT運営委員会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行うこととしており、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教師養成教育モデルの開発として位置づける点が、評価されたものです。

重要なことは、教師養成教育の新たなモデルを「学生の臨床体験の充実」と「地域を基盤とする教師養成教育システム」の開発に求め、それらを実践的・研究的に追究するという本学の方向性が、全体として文科省レベルでも重要視されていることが確認されたことです。

今後は、地域に根ざした大学のあり方と都留市の特色ある教育の発展方向を結びつけるものとして、この取り組みを進展させていきたいと思えます。

（さとう たかし・初等教育学科教員）



テーマ「地域を基盤にした教師教育プログラムの開発」に参加して

長沼 千鶴

のなかでどのような準備をしていけばよいのか、というあたりについてわかりやすい議論と共通の理解が求められ

ているのではないか、と思った。

(ながぬま ちづる・初等教育学科4年)

2月16日(土)に、都留文科大学特色GP「地域を基盤にした教師教育プログラム」をテーマに、40名以上の学生、院生、都留市内の現職教員、そして行政関係の方たちをまじえてのフォーラムが開催された。

私は、基礎知識もないまま臨んでしまったので、きちんと理解できたかどうかは不安だが、一日を通して考えたことを書いておきたい。

第一部の「地域に根ざす教師教育の改革 福井大学の試み」(寺岡英男・福井大学)の報告では「理論と実践の融合」という部分において、現場の状況とはかけ離れた理論にならないように、実践を自己反省し、さらによい実践につなげていくという方法が提起され新鮮だった。実践は子どもに何らかしらの影響を与えるので、それはどのような意味があったのか等を何人かで話し合うことで偏った見方にならない「子ども理解」につながっていくので

はないかと思った。しかし一方で、理論を踏まえた実践も同じように大切だと思う。「子ども理解」にしても、SATにしても、「自分たちは何をこの活動で学びたいのか」「学校は私たちが子どもに何を望んでいるのか」を考えた上で子どもと接することが、同時に追究される必要があるだろう。

第二部「子ども理解と臨床教育学の開拓」(庄井良信・北海道教育大学札幌校)に関しては、「成功体験の積み重ねではなく、失敗した時や立ち止まった時に、チャンスと違って実践を振り返る」という考え方が素敵だなと思った。

シンポジウムを通して、「今日の教育困難の解決は教師一人の問題ではない」としていても、ではそのような場合にむけてどのような力をつけていけばよいのか、この点についてはまだ十分に解明されていないように感じた。「学生は失敗を恐れずに」と庄井氏は話していたが、教師教育のプログラム



「教員養成改革モデル事業」に 採用されました

杉本 光司

文部科学省では、平成18年7月の中央教育審議会
答申(今後の教員養成・免許制度の在り方について)
を踏まえ、教職課程の質的水準の向上を図るための
モデル事業を実施することになり、本学では、テ
マ「教職実践演習(仮称)の施行」の公募に対して、
琉球大学、弘前大学、岐阜聖徳学園大学と共にモデ
ル事業実施校として採用されました。

この科目は、教職課程の他の科目の履修や教職課
程以外でのさまざまな活動を通じて学生が身に付け
た資質能力が、教員として最小限必要な資質能力と
して身についたかという観点で、大学が自らの養成
する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認す
ることにあります(図1)。

本モデル事業を実施するにあたっては、「教職カリ
キュラム検討委員会」で、実施に向けての基本プロ
グラムを作成することにしました。まず対象学生を、
国文学科、英文学科、社会学科の4年次教職志望者
にしぼり、その全責にアンケート調査を実施します。
アンケートは回収後、分析・調査を行うと同時に、
10数名を選定し、個別のヒアリングを実施します。
その選定の際には、本学のSAT(学生アシスタント
・ティーチャー)プログラム、インターンシップ
(学校)プログラムなどの経験を重視します。その

後、個々の学生のこれまでの学習履歴、教育実習に
関する評価、SATやインターンシップをはじめ、
他のボランティア的な実習経験も含め、学生個人の

図1 「教職実践演習」(仮称)とは



図2



入学後の状況がわかる一覧表(ポートフォリオ)を
作成し、それに基づく「教職指導」を実施します
(図2)。このなかから、学生個人における課題や不
足する知識等に対する解決に向けての実施方法を見
出し、実行することになります。

この事業は、本学における取組を通して、カリキ
ュラム化への評価、プログラム評価を行い、最終報告
書を提出することになります。これにより、他の教員
養成大学・学部で無理なく展開できる科目としての
モデルとなること、この事業の目的でもあります。

(すぎもと てるじ・本学教員・情報センター)

地域交流センター公開講座

データでメスを入れる
子どもたちの実態

2008年2月15日開催

杉本 賢二



私は、毎回、公開講座を受講しています。相談室や研究室に直接お伺いしてアドバイスをいただいたこともありませす。そのたびに「個」に応じた適切な指導を可能にするためには「学級集団」の影響が大きいことを痛感していました。今回は同僚16名といっしょに公開講座を受講し、河村（茂雄）先生のお話を聞き、本校の研究の方向性が間違っていないことを再確認しました。

学校においては、河村先生のお話のように全ての活動の基本となる「学級集団」が決定的な意味を持ちます。そこで、本校では研究主題を「居心地がよく、やる気のある学級集団づくり」とし、「人を思いやりながら、自分を表現する能力を伸ばし、集団に積極的に参加できる能力の育成」を指導の重点に置いて取り組んできました。まず、学級を単位とした全校でのチャイム席に取り組みしました。これについては大き

な成果を得ることができました。また、学級や学年の問題を生徒自身に考えさせ、学級役員を中心に、生徒の手でルールを決め、活動させる取り組みをしました。さらに、生徒同士がかかわり合う機会を意図的に設定するようになってきました。

その結果、11月のQ-U^{*}テストでは承認得点と被侵害得点のポイントが全国平均より20ポイントも上回るこ

ができました。これは、学級にルールとリレーションすなわち秩序と良好な関係が成立し始めていることと解釈できます。つまり、今回の講演で河村先生が強調されたことと一致します。

うれしい副産物もありました。それは、手前味噌かもしれませんが、これらの実践を通して教職員の絆が格段に広がり深まったことです。河村先生は教師集団の人間関係が生徒の人間関係に影響すると言われました。学校を正義が通り、夢と希望を語れるところにするために、この絆を活かして、今後にもさらに挑戦していきたいと思えます。

※Q-U (Questionnaire-Utilities)とは児童生徒一人ひとりの学級生活についての意識を質問紙により測定し、その結果から児童生徒一人ひとりの援助ニーズと学級集団の様子を知る尺度のこと。

(すぎもと けんじ・富士吉田市立吉田中学校 研究主任)





平成19年度都留文科大学市民公開講座が開催されました。4回の講座には、合計105名の参加がありました。

総合テーマ

千年を生きる源氏物語 — 多様な展開 —

主催・地域交流研究センター
共催・国文学科

日時・平成19年10月10日、17日、24日、31日

会場・都留文科大学附属図書館4階学習室

第1回・10月10日・

演題・「源氏物語の原点―光源氏と女君たち―」

講師・加藤静子（本学国文学科教員）

第2回・10月17日

演題・「源氏物語の光と色」

―万葉からの文学的系譜―

講師・鈴木武晴（本学国文学科教員）

第3回・10月24日

演題・「おもしろおかし江戸の源氏」

講師・楠元六男（本学国文学科教員）

第4回・10月31日

演題・「近代文学のなかの源氏物語」

―谷崎潤一郎と志賀直哉―

講師・古川裕佳（本学国文学科教員）



地域交流研究センター主催の県民コミュニティカレッジ分担講座が開催されました。5回の講座には、延べ75名の参加がありました。

テーマ

もつとパソコンを 活用してみよう！

講師・杉本光司（本学情報センター教員）

会場・2号館4階2402教室

第1回・10月18日「デジカメで撮影した写真を加工しよう！」

加工しよう！

第2回・10月25日「年賀状と住所録を作って印刷しよう！」

刷しよう！

第3回・11月8日「デジタルビデオで撮影した映像を編集してみよう！」

映像を編集してみよう！

第4回・11月15日「動きのある楽しいカードを作ろう！」

作ろう！

第5回・11月22日「動きのあるホームページを作ろう！」

作ろう！



第10回「山梨県南都留地域教育フォーラム」

主催 南都留地域教育推進連絡協議会富士・東部教育事務所、山梨県教育委員会

テーマ：「子ども達の教育は地域全体で担うー地域連携・
地域交流を深めるためにII」

日 時：2007年11月2日(金)

会 場：富士吉田市立明見小学校



地域総ぐるみの子育て運動を

田中 克己

この「南都留地域教育フォーラム」も、地域の皆さんのおかげで、今年で10回目を迎えました。全体会では、来賓として都留文科大学の金子博学長、富士吉田市の堀内茂市長御臨席のもと、桂高等学校の長田義人校長による基調提案がなされ、アトラクションとして小中学生15名による富士河口湖高

尾太鼓の勇壮な演奏が行われました。分科会は例年の7分科会に「特別分科会」を加えた8分科会構成で、実践報告と質疑討論が行われました。特別分科会では子どもたちをめぐる現代的課題である「いじめ」「体罰」「児童虐待」など、子どもの人権問題について話し合いが行われました。各市町村の人権

擁護委員をはじめ保護者や教職員など、多くの参加者を得ることができました。参加者からは涙ながらに子どもたちの現状を訴える意見も出され、真剣で前向きな話し合いが行われました。

今回も、都留文科大学地域交流研究センター長の西本勝美教授のお力添えを頂き、例年より1名多い8名の先生方を助言者として開催することができました。助言者の先生方には教育に関わる専門的な見地から多くの有意義なお話を頂くことができました。中でも、「人と交わりながら、人から学ぶ。地域に入って、地域を学ぶ。」など、地域教育の核心にふれる、貴重なご助言を多くの先生方から頂くことができました。

「地域教育とは、地域に住むすべての人々と手を結び、未来を担う子どもたちのたくましい育成をめざして進める「地域の人々による、地域の子どもたちのための、地域総ぐるみの子育て運動」である。」私たちは「地域教育」をこのように考えています。今後も、都留文科大学と手を携えながら、地域の子どもたち、地域の教育のために頑張って参りたいと考えています。どうか、地域の多くの皆さんの御支援御協力をお願いいたします。

(たなか かつみ・富士・東部教育事務所 地域教育支援担当)



都留文科大学社会学科の創設を 振り返りその発展を期待します

重原 達也

「今日、大学は社会にどう関わるべきか」というテーマで、社会学科創設20周年記念の講演会・シンポジウムが開催されました（2007年12月8日）。池内了氏（総合研究大学院大学）が記念講演を行ない、シンポジウムでは進藤兵氏（本学社会学科教員）の進行の下に、池内氏、林大樹氏（一橋大学社会学研究科教授）、青池恵津子氏（都留市立図書館）、平野英一氏（本学社会学科教員）が意見を述べました。

今日、少子化による大学淘汰の時代にあつて、「地域貢献」が生き残りのためのキーワードになっていますが、本学は20年以上前からその必要性を感じ、実際に取り組んできたトップランナーです。

シンポジストの青池氏の発言にあつたように、教員、学生、事務職員、市職員、市民がその思いを共有してこそ、「大学は（地域）社会にどう関わるべきか」の具体的な答えが示されるのではないのでしょうか。

（しげはら たつや・都留文科大学学生課長）

20年前、本学に社会学科が誕生したとき、一介の市役所職員であつた私ですが、これでこんな小さなまちにある「市立」の大学としての特色を存分に発揮できるものと大いに期待したことを昨日のように思い出します。シンポジウムの際に配布された「地域交流センター通信」第9号の20ページに掲載されている（故）和歌森太郎元学長の「地域社会学科」構想には大いに共感しますし、また社会学科創設時には、「地域社会学科」という名称を認めない「前例踏襲主義」の当時の文部省の「お役所仕事」に、同じ公務員でありながら憤りを感じたものでした。

「今日、大学は社会にどう関わるべきか」というテーマ設定はたいへん意欲的で、社会学科を超えて大学全体がどのように社会貢献していくか、また本学のみならず「大学」たるものがどのように社会に関わっていくべきかを問う意気込みのようなものを感じました。この記念講演・シンポジウムを通して、社会学科や地域交流研究センターを始めとするこれまでの本学の営々とした取り組みの意義があらためて浮き彫りにされたように思います。

「グローバル」と「ローカル」を合わせた「グローバル」なる造語をよく耳にするようになりましたが、「地球規模的」な視点をもって自分の周辺の「地域的」な課題解決に取り組む能力を身につけた市民の育成は本学の重要な使命であると思います。



鷹の巣遺跡試掘調査への参加

奥田 恵理奈

発掘に参加することによって、私たちは都留市の歴史を振り返ることができました。同時に、調査に参加されていた地域の方々とは触れ合うことで、それまで知らなかった都留のことや、昔の社会の話など興味深い話をたくさん聞かせていただき、考古学という視点からだけでなく別の視点からも都留市を見ることができました。

これからも私たち考古学研究会は、地域の方々と共に発掘に参加することによってより深く都留市を知り、その歴史について考えていきたいと思えます。

(おくだ えりな・社会学科2年、考古学研究会)

私たち考古学研究会は、都留市教育委員会主体の鷹の巣遺跡試掘調査に参加させていただきました。現場では、市役所職員の方と、私たち考古学研究会だけでなく、都留市が募集して集まった地域住民の方々も含め約15名の方々と一緒に調査を行いました。

鷹の巣遺跡は都留市つる4丁目及び5丁目に所在します。この場所が調査の対象になった理由は、都留インターチェンジ開発域が埋蔵文化財包蔵地だからです。調査は18年度3月13～18日にかけて行われました。成果は、トレンチ（溝状の発掘区）から、18年度の本調査で確認されたものと同類と考えられる不定形プラン（掘り込みなどによってできるシミ）が多



数確認されたこと、平安時代末から中世にかけての遺物（土器）が確認されたことです。

はじめの頃は発掘への戸惑いや失敗ばかりで、迷惑をかける場面もありましたが、作業に慣れてくるうちにそれ

が少なくなり、楽しみながら勉強することができました。この遺物はいつの時代のものだろう、このプランはどうしてできたのだろう、など考えながら調査できるようになったことが一番の収穫でした。

編集後記

○本号は、「現代GP」(4～5頁参照)を特集しました。地域交流研究センター活動は、「現代GP」という新たなスケールの構想をもつことにより、一段とダイナミックな展開をはじめました。本年度、社会学科が拡充再編され「環境・コミュニティ創造専攻」がスタートしましたが、このことも大きな可能性を展望させます。(関連記事：22～24頁)。

○第四回「地域交流研究フォーラム」を開催しました(2008年2月23日)。はじめてポスターをつくり準備しましたが、参加者の層がたいへん多面的で、フォーラムにふさわしい集いとなりました。自分たちのまち、村でも取り組んでいこうという具体的な意欲が、フォーラム全体の空気から感じられました(6～9頁)。

○そのフォーラムの今泉吉晴氏の基調講演は、私たちの諸実践が世界の思想と呼吸するはずのものであることを鮮やかに気づかせ、圧巻でした。本号の今泉氏の巻頭文「バラは何と呼ばれようとも香しい」は、フォーラムでの講演と対をなすものであり、自然の本来の在り様と人間性について瑞々しく問いかけています。

○ところで、このフォーラムには大田堯元学長も参加してくださいました(7頁に写真)。都留のフィールド・ミュージアム構想は、大田学長と今泉氏との共鳴関係のなかでその芽を伸ばしていったと聞いています。

○十日市場の復興した畑で、渡邊宗男さん(76歳)に教わりながら学生・教員が麦作りをし、その脱穀した麦を、上野原の小俣トシコさん(81歳)に頼み、昔ながらの製粉場で挽いてもらいました(20頁、『フィールド・ノート第52号』)。私はその小麦粉を少しもらったのですが、それを使って家族の者がスポンジ・ケーキをつくったのです。これがまた市販の小麦粉によるものとは風味と舌触りがまったく違う極上のもの。よろこびの源のようなものを感じました。

○この通信はインターネットのホームページでも公開していますが、その読者の方々もおられるようで、青森の方から出版物が送られてくるなど、交流が広がっています。

○次号は、発達援助部門を中心とする「特色GP」(28頁)の取り組みを特集する予定です。

(編集長・畑潤)



絵・成瀬洋平(本学比較文化学科大学院2年)

地域交流センター通信 第13号：2008年3月24日

編集：都留文科大学地域交流研究センター・通信担当(西本勝美 今泉吉晴 佐藤隆 坂田有紀子 泉桂子 河村茂雄 品田笑子 北垣憲仁 畑潤)

発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341(代)

統括編集者：北垣憲仁